

体育科における受容感を高める授業づくり

ー チームビルディング学習の検討 ー

学籍番号 219340

氏名 児玉 浩望

主指導教員 石川 美久

副指導教員 井上 功一

1. 背景および目的

体育の学習指導要領(2018)において、従来からの目標であった生涯スポーツの実践者を育成することが示されている。この目標を達成するためには、子どもたちが運動基礎技能や知識を獲得するとともに、運動することが楽しいから運動に参加するというような、内発的動機づけによる心的エネルギーを獲得する必要がある。

岡沢(1996)は、内発的動機づけは運動有能感の高まりによって強められたと述べている。よって、子どもたちを生涯スポーツに向かわせるためには運動有能感を高める必要がある。運動有能感は、①自分は運動を上手にできるという自信である「身体的有能さの認知」、②努力や練習すればできるようになるという自信である「統制感」、③教師や学習仲間から受け入れられているという自信である「受容感」の3つで構成されている。

そこで筆者は前述した生涯スポーツと関連させて考察する手がかりとして人間関係が関与する「受容感」因子に着目した。

本塚(2010)は、このような子どもの「受容感」を高めるためには、学習の進め方に関わった役割分担などを明確にすることによって、すべての子どもたちが学習に加われ、自分の意志によって活動できる工夫が必要になると述べている。また、その活動が仲間から肯定的に評価される機会や場面を設けることも大切である。加えて子どもたち相互の認め合いが積極的に行われるよう、肯定的な雰囲気づくりに向けた教師の指導性が重要であると論述している。

そこで、理想的なチームづくりに向けて、目標の達成を目指し、チーム内での教え合いを促し、個々の役割を決め、分担した役割を果たすことを手立てとして行われる教授方略であるチームビルディング学習に着目した。

本稿では、高等学校の体育授業においてチームビルディング学習がどのように応用可能か、実践を通して効果や汎用性について検討した。

2. 方法

2.1 授業概要

大阪府立の公立高等学校2年生男子生徒を対象にバスケットボール単元を実施した。上記の生徒は①3クラスから構成される38名のクラス、②2クラスから構成される23名のクラス、③2クラスから構成される22名のクラスに分かれて体育授業を実施している。この

うち 38 名のクラスを「介入無し」、22 名のクラスと 23 名のクラスを「介入有り」とし、チームビルディング学習を取り入れた。

2.2 調査方法

単元前後にアンケート調査を用いて効果検証を行った。調査項目は 2 つの設問で構成されるチームビルディング学習で教えた知識の理解を確認する知識テスト、12 項目で構成される運動有能感尺度、18 項目で構成される社会的スキル尺度を用いて 3 つの観点から検証した。

統計分析には js-STAR XR+ (release 1.5.0j) を用いた。なお、すべての調査データが揃っている生徒を分析対象とした。単元前後における運動有能感（身体的有能さの認知、統制感、受容感）の比較、社会的スキルの比較には t 検定を実施した。

3. 結果及び考察

授業実践を通して、チームビルディング学習を取り入れることで、介入有りクラスにおいて社会的スキルと受容感の向上が認められた。チームビルディング学習の特徴として少人数で構成されたチームで役割が明確になったことで生徒一人一人の所属意識や連帯感が強まり、自分が仲間を受け入れられる体験を通して得た自信が受容感の向上に影響していると推測される。実際に単元が進むにつれてチーム内での話し合いが活発になり、バスケットボール部やバスケットボール経験者を筆頭にリーダーシップを発揮している様子が多くみられるようになった。ゲーム間の作戦タイムでは、連携の確認をしたり、相手チームのマークを決めたり勝利に向かって取り組む様子も見られた。

4. まとめ

本研究では、生涯スポーツのきっかけとしての「楽しい体育」の実現のために運動有能感を構成する因子の 1 つである受容感を高めるため、チームビルディング学習に着目し、体育においてどのように応用可能か、実践を通して体育におけるチームビルディング学習の効果や汎用性について検討した。

結果として、チームビルディング学習を取り入れることで、社会的スキルと受容感の向上が認められた。チームビルディング学習の特徴として少人数で構成されたチームは役割が明確になったことで生徒一人一人の所属意識や連帯感が強まり、自分が仲間を受け入れられる体験を通して得た自信が受容感の向上に影響していると推測される。このことから、高等学校では生徒の受容感の向上に対して、チームビルディング学習は有効である可能性が示唆された。

本授業で実施したチームビルディング学習は、新たな物的資源や人員確保の必要がなく、学校現場に現存する資源で賄えるため、簡易的で導入しやすい実践方法であると考えられる。本研究が学校体育で生涯スポーツへの一助となることを期待するとともに、これからも体育科における有益な教授法略の在り方について検討していきたい。